



福祉見てある記<sup>37)</sup>

## 天使の宿

出川聖尚子

熊本市の慈恵病院に設置された「このとりのゆりかご」の類似施設が群馬県大吾町にあったと聞き、たずねてみた。「天使の宿」と名付けられた場所について預けられた子どもたちのうちのひとりと今も暮らしている成相八千代さんに話をうかがった。

### 「天使の宿」について

「天使の宿」と名付けられた“子捨て施設”は、児童養護施設「鐘が鳴る丘」の、施設長であった故 品川博氏によって（1986年9月19日から1992年の約6年間）設置されていた。

「親心中多量のいなら  
子供を預けてほしい」と  
勢多郡大胡町の養護施設  
鐘の鳴る丘 品川博氏  
に子捨て施設「天使の宿」  
がつけられ、19日 養護式  
があげられ、  
同園は昨年十月 親子  
命を落としていた状態だった

「親心中多量のいなら  
子供を預けてほしい」と  
勢多郡大胡町の養護施設  
鐘の鳴る丘 品川博氏  
に子捨て施設「天使の宿」  
がつけられ、19日 養護式  
があげられ、  
同園は昨年十月 親子  
命を落としていた状態だった

### 幸せのスタートに

子捨て  
施設 「天使の宿」が落成  
大 胡

「ここから品川さんの養護  
寮、ベッドが備え付け  
られた。子供を預けてくれ  
てほしい」と、品川さん  
が施設長として働き、  
施設長に賛同した養護の  
木



かけ込み寺の子どもたちとともに設置経過説明をする品川さん（中央）  
（上毛新聞S61.9.20より）

## 「天使の宿」への思い

当時バブルがはじけて、群馬県でも親子心中が多発していた。品川氏は、借金とりや家庭内暴力などで逃げてきた人々のために、「かけ込み寺」（親子心中をなくすための施設、ボランティアによって運営）を設置し、すでに30人の子どもを預かっていた。

生後まもない赤ちゃんが2度にわたり、施設の敷地内に置き去りにされ、発見が遅れば命を落としていた状態であったことから、品川氏は「天使の宿」をつくることを考えはじめた。

## 「天使の宿」の設置状況

「天使の宿」は6畳ほどの「プレハブ小屋」で、施設と、施設に程近い場所の2箇所建てられた。その中には、大人用のベッドと暖



天使の宿の室内  
品川博氏（右端）と預けられた子どもたち  
（写真提供 成相八千代さん）

房、部屋の壁にぬいぐるみがおかれていた。子どもが雨露と寒さをしのげる簡易的な場所であった。

## 「天使の宿」に託された子どもたち

預けられた子どもたちは、行政から、「棄児」と届けるように促されていた。品川氏は、「子どもたちは捨てられたのではなく私に預けられたのだ」といい、身近な人には「もし、

子どもたちを棄児とすれば子どもたちに（犯罪者の子どもという）親の負を負わせることになる」といっていた。子どもたちには単独の戸籍をつくり、苗字を品川、下の名はその子にふさわしいもの考えた。

## 子どもたちの暮らし

正確な数は定かではないが、6年のうちに10人近くの子どもの預けられたのではないかという。子どもたちに公的な支援はうけられず、品川氏自身の財産と地域の人々の支援で「天使の宿」に預けられた子どもたちは「かけこみ寺」に暮らしている親子とともに暮らし、そこから小学校、中学校と通っていた。

## 「天使の宿」の終焉

「身勝手な場所を作って」という意見に品川氏は「親が分からなければ、一生子どもは不幸なのか、そんなことはない。その子にすばらしい未来が提供できればいいのだ」とよく語っていたという。児童養護施設でかかわった子どもたちの成長をみて自信を持って答えていた。

しかし、1992年「天使の宿」は突然閉鎖された。品川氏が出張に出かけ留守にしていた数日の間に「天使の宿」に赤ちゃんが預けられ、その赤ちゃんが遺体で発見された。死因は病死であった。品川氏のショックは大きかった。また周りからもそろそろやめたほうがいいと助言があった。

## 「天使の宿」を訪ねて

子どもたちは地域の人々の支援を受けて暮らしていた。地域の人々の施設に対する理解はあったものの、子どもたちに親のことをひどくいうような場面もあったという。複雑な状況の子どもたちの育ちには福祉の専門的なかわりが大切であることを感じた。

また、この訪問で品川氏の言っていたという「親の負」ということばが印象に残った。自分の存在を子どもに伝えないことが子どもの幸せと考える親の切ない思いがあるのかもしれないと思った。

（本研究所研究委員 児童福祉）



成相八千代さんとかけ込み寺  
（現在受け入れてはならず、天使の宿に預けられた子どもたちのうちの一人と成相さんが暮らしている）